

生きてゆくときに
一番大切なことを
お釈迦様から学んだ。



これまで、フェイスブックページ

「生きてゆくときに一番大切なことをお釈迦様から学んだ。」

<http://p.tl/89m0>

にアップしておりました中から、人気の高かった記事を、
いくつか選んでみました。

ちょっと気持ちが落ち込んだり、辛くなった時。

仕事に疲れて、ふっと、一息つきたい時。

そんな時読まれて、辛い気持ちがふっとラクになったら。

そんな思いを込めて綴ってみました。

この度の、メール講座への感想を下された方への
ささやかなプレゼントです。

お知らせしておりながら、遅くなり、申し訳ありませんでした。

よろしく願いいたします。

佐々木 敦

努力は裏切らない————。



どこか美談のように思われている節のあるこの言葉。

あなたはどう思いますか。

まいたタネは、絶対に消えてなくなることはない。

だから努力は、必ず報われる。

「どうせ、そんなこと、やったってムダ・・・」

そんな横槍に、心弱り騙されてはいけない。

お釈迦様の説かれた、因果の道理について綴っています。

私達は、まいたたねまきを忘れておりますが、
忘れていたものであっても、出てきてみれば、わかります。

お釈迦様は、

「過去の因を知らんと欲すれば、現在の果を見よ。

未来の果を知らんと欲すれば、過去の因を見よ」と
説かれています。

もし、私達が過去のどんなたねをまいたのか、

知りたければ、知る方法がありますよ。

それは、現在結果となって出ているから、

現在自分が受けている結果を見ればわかる。

もし、私達が未来どんな結果を受けるのか、

知りたければ、知る方法がありますよ。

それは、現在まいているたねが結果となって現れるから、

今どんなたねをまいているのか、見ればわかる。

だから、「現在は、過去と未来を解く鍵」なのです。

お釈迦様は、永遠の未来も、悠久の過去もみな、
現在ただいまに収まることを明らかにされました。

今の苦しみは、過去の自己のたねまきの結果であることを、
昔から日本人は、
「火の車 造る大工はなけれども 己が造りて 己が乗りゆく」
と歌いました。

火の車とは苦しい状態を言います。
あの家は台所が火の車だと言えば、
家計が苦しいということです。

昔の車は木製で、大工さんが造りましたので、
このような歌となった訳です。

現在の苦しい状態は、誰か別の人が創りだしたものではない、
ほかならぬ自分のまいたたねなのだよと、
お釈迦様が言われたことを歌われたものです。

蚕は、自分の吐いた糸で自分の身体をぐるぐる巻きにして、
湯玉に煉られて苦しみます。

自業自得を、言われたものです。

私達は、自分に苦しみを与えた者を探します。

しかし、この苦しい状態を作ったのは、
他ならず自分だと、はっきり断言されたのです。

そして、未来私がどんな結果を受けるのかは、
今、私がどんなたねをまき、続けているのか、
見ればわかる、と言われているのです。

人生には、様々な出会いがあります。
この人と出会うことができた時から、自分の人生は
転機を迎えた、という人もありましょう。
また、この人と出会ったばかりに、
泥沼にはまってしまった、という人もあるかもしれません。

いずれにせよ出会いは、私達にとって、大きく運命を左右する要素です。

中でも人生で一番最初の出会いとは、
「両親」との出会いです。

これほど、私にとって忘れ得ない出会いもまた、無いでしょう。

なぜこの親のもとに生まれたのか。

考えてみれば、不思議なことです。

地球上で同時に存在している夫婦は

数えきれないほどある訳ですが、

どうして、その夫婦のもとに、自分は生まれたのか。

考えてみればそもそも、なぜ自分は日本に生まれたのか。

アメリカに生まれなかったのか。

ブラジルでもないのか。

お隣中国でもよかったのに。

もしかして、北朝鮮に生まれていたら、

だいぶ運命は変わっていたかもしれない。

誰が決めたのでしょうか。

そして、日本に生まれたといっても、

時代がいろいろあります。

昭和に生まれた人。

昭和に生まれたといっても、戦前に生まれた人、

戦後の混乱期に生まれた人、
高度経済成長の時期に生まれた人。
そして、平成の今日に生まれた人。

携帯電話がない時代を知らない人は、
「携帯電話がなかったら、どうやって連絡をとるんですか？」と
真面目に尋ねる人もあります。
あるいは、ダイヤル式電話の掛け方がわからないとか。
でも、確かに私も、そもそも電話が無い時代に、
どうやって連絡をとっていたのだろうかという疑問に思ったりしますから、
そういう意味では、同じ類かもしれません。
江戸時代などは、飛脚とかしかなかった訳ですから。
今とは全く違う様子だったことでしょう。

このように、生まれた時代といっても、いろいろ訳あります。
これから先、100年後、この世界がどうなっているかは
わかりませんが、無事この地球が存在していれば、
そこに生まれてくる人は、だいぶ違う運命を受けるに違いありません。

他にもいろいろあります。
どうして、自分はこんなに頭がよく生まれてしまったのか？

どうして、私はこんなに美しく生まれてしまったのだろうか？

どうしてオレは、こんなに生まれつきスポーツ万能なんだ？

どうしては、私はこんなに生まれつき人気者なのかしら？

そんな悩みならば、大変結構ですが、

どうでない場合も、多々有ります。

人間は生まれながらに平等といえは、聞こえはいいですが、

実際には、生まれた時点ですでに、相当の差別があることを、

認めざるを得ません。

その違いは、何によって生じたのでしょうか。

運命のちよつとしたいたずら、という人もありますが、

いたずら程度の言い訳で済まされる問題でしょうか。

原因無しに結果が生まれるということは、

絶対にないと、お釈迦様は教えられました。

自分なんて、
やっぱりダメなのかな—————。
そんなふうに、しょげてしまった時。



そんな時、誰かに自分の悩みを聞いてもらえること。
こんなに、ほっとして心落ち着くことはないでしょう。

悩みを相談しても、聞いてもらえなかったり、

逆に、お前が悪いと言われてみたり・・・辛いものです。

お釈迦様は、私達にできる素晴らしい行いの1つに、
「施し(布施)」を教えておられます。

お金やものを施すことも、もちろん素晴らしい布施ですが、
財産もお金もなくても、何もなくてもできる布施を、
お釈迦様はたくさん教えておられます。

私達が、誰かの相談に乗ったり、
しよげていたりする人を励まそうとするとき、
いたずらにこちらから話しようとするよりも、
話を聞くことが大事なんだよと、よく、
先輩から教えてもらったものでした。

聞き上手は、話上手。
口は1つ。でも、耳は2つでしょう。
しゃべる2倍、聞かなきゃだめなんだよ。

そして、聞く時は、真剣に聞く。
相手の方の苦しみを、じっと感じながら聞く。

そうすることで、相手の方はとても楽になられる。

「聞く」ということは、「布施」なのだと学びました。

さて、仏教ではいまだ仏のさとりを開いてはいないけれども、

仏のさとりを求めて修行している人を、「菩薩」と

言われます。

本来は、「菩提薩埵(本当の幸せを求める人)」のことを

略して「菩薩」といいますから、

どんな人であってでも、本当の幸せになりたいと思つて、

お釈迦様の教えを聞いている人は、みな、菩薩ということになります。

もしかしたら、これをお読みの皆さんも、そんな方かもしれませんね。

地蔵菩薩とか、観音菩薩とか、弥勒菩薩とか、

有名な方はたくさんおられます。

地蔵菩薩といえば、日本ではお地蔵さんとして有名で、

道端に赤い前だれをかけている石の像がよくあります。

菩薩というと、そんなのを想像して、
トイレも行かない、牛乳も飲まないようなのを想像している人が
ありますが、そうではありません。

本当の幸せを求めている人は、みな菩薩なのです。

その「菩薩」に、「観音菩薩」と言われる方があります。

「観音」とは、「音を観(み)る」ということです。

「音」とは、この場合衆生(すべての人)の苦しみの声のことであり、

「観る」とは、聞くことですから、

苦しみ悩む人々の中へと自ら入って行かれ、

その声をよく聞き、全身でその苦しみを受け止める。

そんな姿が思い浮かびます。

観音は、仏様の慈悲を表す菩薩であると言われます。

仏様の慈悲の心とは。

すべての人の悩みは、私の苦しみ悩みであると、

衆生の中へ入ってゆかれ、

そして、その苦しみ悩みを、根本から取り除いてやりたい。

そして本当の幸せにしてやりたい。

森の中を慢歩する柔和な巨象の如く、

煩惱の林に遊び、自在に衆生済度なされるのが、

仏様の慈悲の働きなのだと、お釈迦様は教えられました。



「正直者がバカをみる、 やりたい放題やりちらせ」



こんな人生観は、巷にあふれていることでしょう。

お釈迦様は、決してそんなことはない、
正直は、必ず報われるのだよ、と
徹底して、三世を貫く因果の道理を教えられました。

夏の間、しばらくの期間だけ、みんなと、かまびすしく鳴くセミに、
「お前が生まれてくる前にはな、春という季節があったんだ。
それは、きれいな桜の花が咲いていたよ。見せてやりたかったがね。」

そして、お前が死んだ後には、あの銀杏の木は、とてもきれいに色づくんだよ。見せてやれないのが残念だ・・・」

そう言っても、セミは賑やかに鳴くだけで、とても信じないでしょう。

料亭の生簀(いけす)を悠遊と泳ぐ魚を見て、

「お前たち、あわれだな、やがてあの板前にとらえられて、

ハラワタもろもろ、裂かれるのだぞ。。。」と言われても、

ぎょろっと、こちらを見返されるだけで、

そのまま、魚たちは目の前を通り過ぎてゆくことでしょう。

お釈迦様は、私たちの生命は、実は、永遠の存在なのだと、

その実態を教えられました。

私たちが、おぎゃつと生まれてから死ぬまでを「現在世」、

その生まれる前を「過去世」、そして、死んでから後を「未来世」と

言われ、三世を貫く生命の存在を明らかにされました。

そう聞くと、「そんな過去世があったなんていわれても、

覚えていないぞ」と言われそうですが、それは、当然です。

蟬は春秋を知らないように、我々は三世を知りません。

肉体もろとも、記憶、意識もすべて、消失するからです。

丁度、私たちが、銀行口座を作り、口座の出し入れを繰り返すと、やがて、通帳がいっぱいになります。

そうすると、新しい通帳に窓口で交換してもらい、古い通帳は使えないように処理をしてもらいます。

その際、古い通帳の最後が10万円だったのに、新しい通帳の始まりが、5万円となっていたら、目の色変えて、窓口に駆け込むでしょう。

同様に、その新しい通帳が一杯になって、また別の通帳に切り替わる時、残高が15万だったのに、新しい通帳では、30万になっていたのを、しめしめと思っている、銀行を出る時に、「お客さん、ちょっと待ってください」と呼び止められるか、後日呼び出しがあるでしょう。

通帳は、材質的にまったく別物に切り替わってゆきますが、金額(口座残高)は、一貫して流れているのです。

新しい通帳の始まりがあるということは、
前の通帳があったということです。

そして、1冊の通帳が終わるということは、
次の通帳が始まるということなのです。

通帳は全く別物に切り替わりますが、金額は、貫かれます。

丁度そのように、私たちの肉体は、死ねば入れ替わり、
記憶や、意識もすべて亡くなります。
そこを一貫して流れているのが、「阿頼耶識」という心なのです。

阿頼耶識とは、私たちの業が蓄えられている、
蔵のようなものですから、
各自の造った蓄えられた行いによって、私たちは、
つぎの生、運命を受けるのです。

言ってみれば、私たちの生は、夢のようなものであり、
1つの夢が終われば、また次の夢が始まります。

夢の中の「私」は、確実に夢の中で「私」として行動していますが、「私」の肉体は実は、布団の中に横たわっているということが起きています。

どちらが「私」なのか。

夢の中であっても、夢が夢である間は、現実です。

ですから、夢さめるまでに、私たちは、夢が夢であると、知る由がないのです。

だから、強盗に追いかけられ汗ぐっしょりになったり、宝くじにあたって、舞い上がって喜んだりするのです。

皮肉にも、夢の中のことがすべて、夢であったと知らされるのは夢覚める時です。

この世の夢が覚め、次の夢は、どんな夢になるのでしょうか。

私たちの現在世、過去世、未来世の関係を、お釈迦様は、こう教えられています。

過去の因を知らんと欲すれば、現在の果を見よ。

未来の果を知らんと欲すれば、現在の因を見よ。

過去、どんな行いをしてきたのか知りたければ、

今受けている結果を見なさい。

今年1年の私の受ける結果は、去年1年の努力が生み出したもの。

怠けたきた者はそれだけ、頑張らねば追いつきませんし、

必死に努力してきた人は、その分報われるでしょう。

同様に、今年1年の努力が来年の1年の私を決します。

去年頑張っても、今年怠ければ、来年はその結果を

受けねばなりませんし、同様に、昨年怠けていても

それを反省して、今年巻き返せば、来年は挽回できます。

未来、どんな結果を受けるのか知りたければ、

今、自分がまいているたねまきを見よ、と言われたのです。

ですから、過去も、未来も、現在の「今」に収まるのだと、

「今」の私の姿を徹底して見よ、と教えられたのが

お釈迦様でありました。

「今」の一瞬に、悠久の過去も、永遠の未来も、
収まっているのです。

ですから、現在は、過去と未来を解く、鍵なのです。

私たちは、生まれた時すでに、様々に才能や境遇に
違いがあります。

日本に生まれる人。

アメリカに生まれる人。

スポーツが得意な人、苦手で泣く人。

美しく生まれてきたひと、そうでもなく生まれた人。

なぜ、そのような違いが生ずるのでしょうか。

生まれたことは結果ですから、その原因は

その前に、無ければなりません。

昨日も少し触れましたが、

1人の命を奪った罪が、1回の死刑によって

償われるとすれば、

100人の命を奪った者は、残り99回の死刑で

償うべき罪はいつ償われるのか。

当然、未来に受けねばならないのが必然だと、
教えられたのがお釈迦様でありました。

工事現場で、鉄骨が上から落ちてきて圧死という
痛ましい事件が報道されることがあります。
何でその人がそんな目に。

しかし、私たちが道を歩いていると、
アリの行列に気づかず、数匹を踏んでしまうことが
あるでしょう。

不意に歩いてきた人間の足の下敷きになったアリには、
驚くべき出来事であり、
巣に戻れば、妻子があつたかもしれません。

それらのアリの名前も、素性も、我々は
知る由もありませんが、もし、その行為の結果が
瞬間的に帰ってくるならば、
1秒たりとも、生きておれない、たねまきを、
私たちは繰り返して生きているのではないのでしょうか。

それらの行為の結果が、今は帰ってこないからこそ、
生きておれるのです。

それら一切の業力を、阿頼耶識に蓄えたまま、我々は、
次の生へと移ってゆくのです。

儒教で有名な孔子の弟子であった顔回は、
最高的人格者と言われましたが、極貧の中夭折しました。
ところが、盗跖という同時代を生きた大泥棒は、悪事の限りを尽くし、
生涯、富貴栄華を極めて死にました。
わが弟子の不遇を嘆き、孔子は、天道是か非か、
「ああ、天われを亡ぼせり、天われを亡ぼせり」と嘆いたと言われます。

なぜこの人がこんな目に。

「正直者がバカをみる、やりたい放題やりちらせ」
そう思う気持ちも、判るのです。

しかし、顔回がこの世で作った真面目な善いたねまきは、
必ずやがて報いて恵まれるのであり、
盗跖にこの世報いることのなかった悪業は、

間違いなく、未来、本人が一身に受けねばなりません。

儒教は、我々の幸不幸を、今生においてのみとらえていたから、孔子は、天を仰いで慨嘆せずにおれなかった。

江戸時代の儒学者頼山陽は、釈迦が孔子と相撲をとり、負かされる画を描き、仏教者の雲華院大含に「賛をしてくれ」と依頼しました。

大含、しばらく考えて、「孔子、三世を知らず、釈迦顛倒して、これを笑う」と揮毫したといえます。

人生を、今生だけにとらえて、道德倫理生活のみを強調する人も、お釈迦様の教えよりすれば、無知蒙昧と言わざるをえないのでしょう。

一番、
耳にして胸が締め付けられる
言葉—————。



「私、もう、死にたい・・・。」

自分の大切な人が、もし、そう、打ち明けてきたら—————。

お子さんを持たれる方であれば、

もし、お子さんが、そう、涙ながらに訴えてきたら・・・

身も心もズタズタに、胸が張り裂けるような思いがするでしょう。

しかし――――。

「死んだ方がマシ。生きてたって、いいことない。」

この言い分を、誰か、説得することができるでしょうか。

「生きていればいいことあるよ。」

「朝の来ない夜は無い。」

そんなありきたりの言葉は通用しないでしょう。

一番いいのは、「私は、イヤだ。」というメッセージを
伝え続けることなのだそうですが、

しかし、それも、こちらがそのメッセージを発することが
できなくなった瞬間に、すべてが終わってしまいます。

ある時のこと。

お釈迦様が托鉢中、大きな橋の上で、

辺りをはばかりながら1人の娘が、
しきりとたもとへ石を入れているのを、ご覧になりました。

自殺の準備に違いない、と知られたお釈迦様は、
早速近寄られ、優しくその事情を尋ねられたのです。

相手がお釈迦様と判った娘は、心を開いてこう打ち明けました。

「お恥ずかしいことですが、ある人を愛しましたが、
今は捨てられてしまいました・・・。

世間の眼は冷たく、お腹の子の将来などを考えますと、
死んだ方が、どんなにましだろうと苦しみます。

もし、この私を哀れに思われますならば、お釈迦様、
どうか、このまま死なせてくださいませ・・・」

娘はよよと、泣き崩れたのです。

その時お釈迦様は哀れに思われ、
こう諭されたと伝えられております。

「愚かなそなたには、譬えをもって教えよう。

ある処に、毎日、重荷を積んだ車を朝から晩まで
引かねばならぬ牛がいたのだ。

つくづく、その牛は思った。

なぜオレは、毎日こんなに苦しまねばならぬのか、
自分を苦しめているものは一体何なのか、と考えた。

そうだ！この車さえなければオレは苦しまなくてもよいのだ、
と、牛は車を壊すことを決意した。

ある日、猛然と走って、車を大きな石に打ち当てて、
木っ端微塵に壊してしまったのだ。

ところが飼い主は、こんな乱暴な牛には、
頑丈な車でなければまた壊されると、
やがて鋼鉄製の車を造ってきた。

それは、壊した車の何十倍、何百倍の重さであった。

その車で、重荷を同じように毎日引かせられ、
以前の何百倍、何千倍苦しむようになった牛は、

深く、後悔したが後の祭りであった。

牛が丁度、この車さえ壊せば苦しまなくてもよい、
と思ったのと同じように、そなたはこの肉体さえ壊せば
楽になれると思っているのだろう。

そなたには判らないだろうが、
死ねばもっと苦しい世界へ飛び込まなければならないのだ。

その苦しみは、この世のどんな苦しみよりも
恐ろしい苦しみなのだよ・・・」

娘は、初めて聞かされる一大事のあることに驚き、
我が身の愚かさを悔い、仏弟子になったと伝えられます。

お釈迦様は、すべての人は、この命が終われば、
取り返しのつかない一大事のあることを、教えておられます。

なぜそうなるのか。

今日は、十分お話する紙面がありませんが、

仮に、人を100人殺した人が、
1人の殺人に対し、1回の死刑で償わねばならないとしたら、
あとの、99人分の人殺しの結果は、
どこで償うのでしょうか。

もしそれが、1回の死刑で、
それ以降は、できないからチャラになってしまう、と
すれば、1人殺しても100人殺しても変わらないのから、
1人殺してしまえば、何人殺したって
いいじゃないか、という暴論が成立するでしょう。

いや、1日の日当が1万円の仕事を100日やって、
その日1万円しかもらえなかったならば、
後日、99万円をもらえると思うのが普通で、
もし、その分の給料が支払われなければ、
訴えられてしまうでしょう。

今、生きている時に、私たちが造りと作っている、
行い(業)は、すべて私たちの心(阿頼耶識)に収まり、
やがて、実を結ぶのです。

生きている間に、実を結ばなかったタネはどうなるのか。

後から、刈り取るしかないのです。

その、刈り取らねばならぬタネは、

どれだけあるかしれない、

そこに早く気づきなさいと、言われたのがお釈迦様でありました。

自ら、命を絶つことは飛んで火にいる夏の虫なのです。

お釈迦様は、自殺を、善悪ではなく、賢愚で論じられました。

「周りの人を悲しませるから」

「家族に迷惑をかけるから」

それは、本人のことではなく、回りの人の影響についての話です。

本人は、この肉体さえ消し去れば楽になれると思っているのですが、

果たしてそうなのか、否、そうでないのだよと、

お釈迦様は教えられているのです。

生きている時に、果たさねばならぬ目的がある、

だから、人命は、地球より重い。

人身受け難し 今すでに受く————。

人間に生まれることができてよかった、
という幸せに今、なれる。

そう、ハッキリ教えられたのが、
お釈迦様でありました。



「こんな目に逢うことも、
自業自得だとはけしからん！」



お釈迦様が私たちの運命は
自業自得の道理によって決まることを、
綴ってまいりましたが、お読みの方には、当然
こう思われる方もあると思います。

実は、「因果の道理」とは、略された言い方で、
正式には、「因縁果の道理」と言われます。

「縁」とは、原因が結果になるのを助ける

はたらきをするものです。

ちょうど、モミダネは、机の上に置いておいても実らず、
苗を作り、農家の方の不断の努力によって育ち、
そこに、適切な日光、水分、温度、肥料と、
私たちの口に入るまでには、大変な手間がかけられれていることは、
ご存じの通りです。

この、農家の方の大変な苦勞、
日光、水分、温度、肥料、・・・等一切が「縁」です。

もちろん、モミダネでなければ、米にならないのは事実で、
「因」は果を生み出す決定的な要素ですが、
決して、「因」だけでは、「果」とならず、
必ず「縁」の助けが必要です。

奈良県の吉野山は、桜の名所として有名です。
春になれば、山が桜か、桜が山かと言われる
美しい桜見物に行く人は、多いことでしょう。

ある人が、冬の吉野山に行ったところ、

枯れ木のような桜が、つくんつくんと立っているので、
春になると咲いてくる、あのきれいな花をどこに蓄えているのかと、
枝を一部刻みにしてみたところ、
花びらはどこにもなかったといいますが、当然のことです。

「年ごとに 咲くや 吉野の山桜 木を割りてみよ 花のありかは」

「春の陽気」という「縁」に触れ、
冬の間、木の中に内在し続けた桜の「生命力」、
「勢力」が「因」となり、「美しい桜の花が咲く」という「果」を
もたらすのです。

木に宿る目に見えない桜の勢力が
春の陽気という縁に触れ、あでやかな花を咲かせるのです。

パソコンでも、入力した結果がハードディスクにおさまり、
ある操作をすると、画面から消えて見えなくなり、
操作によって、また画面上に見えるようになります。

私たちの身に起きる一切の運命は、
私たちの阿頼耶識に収まった目に見えない業力が、

縁と和合して引き起こしたもののなのです。

すべて我が身にやってくる運命は、
私の行いが引き起こしたの結果です。

対向車線を走るトラックからの落下物によって、
大破した車があります。

当然悪いのは、積載量オーバーのトラックです。

しかし、なぜ、前後にも車が走っていたのに、
その車が、事故にあったのでしょうか。

そんな、恐ろしい車が対向車線に走っていて、
しかも丁度積載物が落下するその瞬間、その真横を
走っていなければならなかったのでしょうか。

ちょっと、トイレ休憩をとってれば、
全く問題なかったのです。

あるいは、1分早く家を出ていても、大丈夫だったでしょう。

なぜ、その時間、その場所に。

ここに、業力が大象百匹よりも強いと言われる
恐ろしさを感じずにおれません。

どうにもならない力で、そこへ引きずり出されるのです。

もちろん、そんな無法ドライバーを放置してよい訳が
ありませんから、当然処罰の対象です。

しかし、苦しんでいるのは、他のどの車でもなく、
間違いなく、事故にあった「その車」なのです。

昔の人は、これを

「火の車 造る大工は なけれども 己が造りて 己が乗りゆく」
と歌いました。

火の車とは苦しい状態です。

そんな苦しい状態は誰が作り出したのか。

間違いなく、私の業が作り出したものなのです。

自分に苦しみを与えたと思しき相手を探して恨むのは、
「縄をウラム泥棒」で、愚かなことです。

なぜ、あの人でなく「私が」結婚詐欺にあったのか。

なぜ、彼でなく「オレが」ブラック企業に入ってしまったのか。

なぜ、あの子ではなく「私が」こんな目に。

そう思う事例は、枚挙にいとまがありません。

もちろん、悪い縁を避けることは必要で、

それらを徹底して排除しなければならないのは

言うまでもありませんが、間違いなく、因は私にあったのです。

阿頼耶識には、ないタネ無し、まかぬタネ無し、

どんな結果が帰ってきてても文句の言えぬ私と、

教えられたのがお釈迦様でありました。

私の「貯金通帳」は、とんでもない借金を抱えて

流れているのです。

ではなぜ、そんな厳しい実態を、お釈迦様は明らかにされたのか。

「そんな私が、どうしたら本当の幸せになれるのか、」

ここに私たちの目を、向けさせるためであったのです。

お釈迦様、生涯教えられた本当の幸福を、

「功德の大宝海」と教えられます。

目の前に広がる広大な海のような幸せを、

説き明かしたのが一切経(お釈迦様45年の教えの全て)。

しかしそれは、その海から、徳利水1杯分をくんだようなものだと、

おっしゃってお釈迦様は、亡くなっておられます。

二束三文の黒い炭も、高価な輝きをたたえるダイヤモンドも、

同じ炭からできている。

常温常圧では黒い炭の塊としかありませんが、

特殊な高温高圧により、ダイヤと輝くように、

煩惱具足の凡夫が、大変強い縁に触れ、

一切の借金が貯金に転ずる如く、

流した涙が真珠の玉となって帰ってくる、

そんな常識破りの幸福を説かれたのが、
お釈迦様の生涯でありました。

しかし――。

「そんなことを、説いても、誰も信ずるはずはなかろう。」

お釈迦様、一度は自殺を考えられたといわれるのです。

「そんな幸せは、百千万劫説いても、説きつくすことはできない。」

1劫とは、4億3200万年のことですから、
気の遠くなるような長い時間かかっても、
説き尽くせないと言われたのです。

しかし、言ってさえわからぬことを、言わねばもうわからぬと、

意を決してやるせなき慈悲心で説かれたのが

お釈迦様45年間の教えとなり、

今日一切経として書き残されて、私たちの知るところとなったのです。

よく、仏教の話をしていて、

「真面目ですね」

と私が言うと、

「いやいや、そんなことはありませんよ」と言われる方があります。



私が「真面目」と使うのは、

牛乳瓶の底のようなメガネでいつもがり勉しているという意味では
ありません。

せっかくですので、少し書いてみたいと思います。

室町時代の有名な禅宗の僧侶一休さん。とんちで有名です。

小さい時、「このはしわたるべからず」という看板を見て、
皆が困っていたところ、橋の真ん中を渡って見せた、などの
話があります。

アニメに出てくる一休さんは、とてもかわいいですが、
大人になってからはそうとはいかず、
よく歴史の資料集に出てくる、ああいう顔をしています。

ある村はずれの工事現場で、材木が積んであったその上に、一休さん
が立ち、

頭の上に草を乗せていました。

工事が始まるので、村人たちから、そこをどいてもらいたいと言われても、
どいてくれません。

困り果てた村人の中で、ある人が何かを差し出したところ、
すっと材木の上から降りたそうです。

そういうことで、村人たちの中に、
ひと波乱起こすことはたびたびあったようです。

ちなみに、差し出したものが何であったか。

わかりましたでしょうか？

答えは最後のお楽しみに。

またある時、一休さんが村はずれの、
どこから見てもぐんにやりまがった松の木に立札を立てました。

七曲りの松と言われる松でしたが、
「この松をまっすぐ見た者には、金一貫を与える。一休」と
ありますから、一休さんの問いかけであったのは明らかでした。

みるみる間に、松の木の周りは、黒山の人だかり。
みんなどうにかして、その松をまっすぐ見ようと必死です。

ある者は上から見る。またある者は遠くから見る。
ある者は下から見てみたり。

しかし、どこからみてもぐんにやり曲がっている松、

まっすぐに見える道理がありません。

村人たちがどうしたものかと困っているところへ、
当時、一休とともに有名であった蓮如上人という方が来られました。

蓮如上人は、一休が、どれだけとんちが得意といっても
この方にかかったらかなわないと、一目置いていた方でありました。

ある時、一休が両手の中にいれた雀を
「生きていると思うか、死んでいると思うか」と尋ねると、
蓮如上人は、階段に足をかけ、
「ならばオレがこれから階段を上ると思うか、下ると思うか」と
切り替えされたと言われます。

もし雀が生きているとの返答ならば即刻雀を握り殺し、
死んでいると答えたならば、
ぱっと雀を放すつもりだったとの魂胆を見抜かれての当意即妙でした。

早速蓮如上人、「わしはもうまっすぐに見たから、
今から一休のところへ行って来る」。

一休が家から出てくるなり、「ああ、蓮如、お前はダメだ」との返答。
「なぜだ？」と不審がられる蓮如上人に、
「お前、看板の裏見てきたか？」と尋ねるので、
「裏までは見てこんかった」と、蓮如上人また、松のところへ
戻ってこられました。

すると、看板の裏には「ただし本願寺の蓮如は除く」とあったので、
蓮如上人、一休もそこまでわしのことをわかっておるなら、
よかろうと帰ろうとされたところを、
村人たちが呼び止めます。

このとんちがどうにも解けず、
どうにもおさまりつかない村人たちからせがまれた
蓮如上人の答えは意外なものでした。

それは――。

「まがった松じゃのう、とみるのが、まっすぐな見方じゃぞ。」

そうです。

どこから見てもぐんにやりまがった松。

それを定規がまっすぐであるように、
まっすぐ見ようとしても無理な話なのです。

そのように見ようとしている姿こそ、
松を曲げて見ようとしている姿なのです。

しかし、まっすぐに見ればお金がもらえる・・・

その私たちの都合こそ、目の前のものを、
まっすぐ見させなくするのです。

まっすぐに見ること、
ありのままに見ることを仏教では「正見」といわれます。

これは、とても難しいことです。
私たちの都合が入るからです。

お釈迦様は、
「無常を観ずるは、菩提心の一なり。」
と説かれました。

「無常」とは、常がないこと。続かないこと。

一言でこのように言われる時は、

「生きている人間は、100%死を免れない」厳粛な事実を言われます。

「観ずる」とは、「ありのままみる」ことです。

「菩提」とは本当の幸せですから、

「やがて必ず死んでゆかねばならない私の姿を、

ありのままに見ることが、本当の幸せへの第一歩である」と
言われているのです。

「一」とは、「はじめ」と呼んで、第一歩ということですが。

「初」もはじめ、「始」もはじめですが、何度もある「はじめ」です。

「一」は、1回しかない、「はじめ」なのです。

仏教はここからしか始まらないのだよ、とお釈迦様言われているのです。

ちなみに、「観ずる」とは、「感ずる」ではないですかという人が
ありますので、少しふれておきたいと思います。

「感ずる」というのは、感情ですから、続くものではありません。

ああ、私も死んでゆくのかしら、と感ずるのは、

近くで葬式があった時、交通事故のニュースを聞いた時など、

何かきっかけがあった時でしょう。

しかし、感情は続きません。

私たちの根底には、「自分は死なない」という思いが頑としてあるのです。

「今日は死なない」と私たち、思っています。

もし、今日死ぬと思ったら、今と同じことはできないでしょう。

しかし、もし「今日は死なない」の思いが正しければ、

今日死ぬ人は一人も無いのです。

人間誰も、死ぬときは、「今日死ぬ」のです。

やがて死ななければならぬことくらいわかっている、と思う私たちですが、

そんな当たり前の真ん中と思うことでも、

腹底、私たちははねつけているのだと、お釈迦様は説かれました。

ですから、その厳粛な事実を、感情的に「感ずる」かどうかではなく、ありのままにみて、受け入れよ、と言われたのです。

これを、「観ずる」と言われたのです。

そんな私たちが、100%死なねばならない、と聞くと、
だから、「仏教は悲観的だから、いやだ」、という人がありますが、
はたしてこの非難は正しいのでしょうか。

たとえば、テストの結果が80点だった人が、
こんなにオレはできない、本当は60点しかとれない人間だ、と
思えば悲観的でしょう。

もし、試験の点数が80点で、
そんなことはない、オレの点数は実力では100点だと
思う人があれば、逆に楽観的な人かもしれません。

どちらがよいのでしょうか。

試験の結果が80点であれば、
額面どおりに受け取らなければ、
正確に評価することはできません。

結果をありのまま見て、よかったところはよかったこととして、

悪かったところは向上しようと努めてゆかねば、
正しい方向の努力はできません。

この態度が、真面目と言えるのではないのでしょうか。

真面目とは、自分を捨てることです。

自分の都合を一切排除して、目の前の事実を、ありのままに受け止める。

これは、実はとても大変なことです。

生ある者は必ず、死に帰す。

これは、世のならいです。

そんな厳粛な事実を、ありのまま見つめる。

お釈迦様、仏教の出発点は、先ほど書きましたように、

死をありのままに見つめることだと説かれましたから、

人生に対して、真面目になれ、ということとも言えましょう。

そういう意味で、真面目に人生を見つめて頂く何かの

きっかけになればと、このフェイスブックを書いております。

死を、ありのままに見つめることは、
いたずらに暗く沈むことではありません。

それはむしろ、生きている一瞬一瞬を、
日輪よりも明るくする第一歩なのだと、お釈迦様は教えられました。

ちなみに、一休のとんちの話、答えはお茶です。
材木(木)の上に一休さん(人)が乗って、
頭に草(艸)を乗せたら、「茶」の字になりますね。

